

動物物語

s0966061

小学校の登場人物

主人公

兎

狐・・・一番最初に言いふらした張本人
狸、狼、羊・・・帰りが一緒になりやすい人たち。

中学校の登場人物

蛇・・・蛇の双子。暴力をふるい、暴言を吐く不良。

高校の登場人物

ネズミ・・・趣味が合い、オリエンテーションで話した女の子

蜘蛛・・・趣味が合い、授業が一緒になった女の子

発端

兔さんが一年生の放課後にそれは起こった。

兔さんは学童に通っていた。学校の近くに学童が有り、夕食の前に学校の滑り台で遊んでいた。帰るという時に兔さんは滑り台の上で急にトイレに行きたくなり内心焦っていた。

「う～ん。間に合わないよー。」

兔さんは結局間に合わなく、失禁してしまったのだ。そして恥ずかしい思いをしているといつの間にか狐君に見られていたのだ。そして、兔さんはここから色々な事件に巻き込まれるのだった。

次の日になり、兔さんは皆と話をしようとするすると皆は兔さんを避けた。

「なんで避けるの？」

兔さんは首を傾げ、話しかけようとしていたが誰かの声が聞こえた。

「知ってるか？兔っておしっこしたんだぜ？滑り台で。」

「まじかよ。」

そう、これは狐君と狼君の話だ。昨日の出来事が広まってしまったのだろう。どこまで広がるのか兔さんはびくびく怯えていた。

1メートル

小学校二年生になり、兎さんは居場所がなくなり毎日相談室へ遊びに行くようになっていました。

兎さんはやっと豹さんと、猫さんと友達になりやっと仲間になったと思ったら、豹さんが皆と一緒に兎さんを弄り始めた。最初は豹さんが兎さんに向かって悪い顔をしながら近寄った。

「ねえ、兎さん。私たちから1メートル離れて歩いてくれない？キモイんだよね。」

「え・・・。」

兎さんはびっくりしたが普通に歩いたしなにもしなかったのだが、豹さんは兎さんが近付くと早いスピードでその場から居なくなった。

「わー。兎さんが近寄ってきた。菌が移るぞー。」

「きゃーきゃー。」

女の子たちは兎さんが近寄るたびに「菌が移る」やら「わー。」っと叫んで走り去ることが多くなった。豹さんは猫さん宛に手紙を出した。それは悪質なものだという。

『あなたのことが嫌い 兎より』

しかし、猫さんは豹さんが書いたのだと分かっていた。それはなんと名前のところがテープで書いてあったからだ。そのテープを外すと「豹より」と書いてあったらしい。

夏になり兎さんと猫さんはプールに遊びに行った。そこへなんと豹さんも来ていたのだ。豹さんは兎さんと一緒に猫さんが一緒にいるのを見て猫さんを連れ出し話掛けた。

「なんで兎さんと離れないの？菌が移るよ？」

「なんでわざわざといけないわけ？」

猫さんがそういうと豹さんはがっかりしたような顔をして去って行った。

帰り道

帰りは兎さんは一人で帰っていた。しかし狼君や狸君や羊君が後ろにくっついて帰って行った。

しばらくすると、狼君は兎に声をかけた。

「なあ兎。おしっこ漏らしたんだって？だっさー。」

「うるさい！！」

「おーおー。兎が怒った。」

兎さんは怒って狼君と狸君と羊君を睨むと狸君は兎さんを指差して笑った。

「うるさい！！」

「あれ？そっちから帰るの？じゃあ俺らもそっちから帰ろう。」

兎さんは怒鳴ると通学路とは別の道で帰っていくと、それに気付いた羊君が気付き、狼君と狸君と羊君は兎さんについていった。兎さんは走って自分の家へ帰っていった。それが兎さんが帰るたびに起こった。

短足

兎さんは中学になると制服からジャージもしくは体操服に着替えることになり未だ春だったため、体操服で動いているとツイنزの蛇さんにであった。すると兎さんを見るなり指をさして笑った。

「うわー。短足。ありえなーい。」

兎さんはそれを聞くなり急いで教室に戻りそれからというもの夏の体育の時に体操服になるとき以外は体操服の上にジャージを上下を先生に「暑いなら脱ぎなさい」と言われたとしても中学校三年間着ることになった。

交通事故

兎さんが塾に通うようになり、自転車で夜の道を走っていると車に気付かずに当たってしまった。

兎さんが混乱しているので解説をすると、車が止まっているところを兎さんが自転車で通っていると急に車の運転席のドアが開き、運悪くそのドアの一部が兎さんの目に当たったのだ。

「大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。車大丈夫ですか？」

「ちょっと傷ついたけど大丈夫だよ。」

兎さんは混乱していて自分の非だと思い謝り、自転車を飛ばして塾に行くと左目の近くが切れており血が滲んでいた。それから寝るときは左右の閉め方が違くなってしまった。

暴力

中学3年生の頃あるアニメを見ていた兎さん。兎さんはそのアニメで亡くなった生徒の机の中にノートが入っておりそのノートの中身はクラスの子の似顔絵と誕生日と良いところを書いてあった。兎さんはそのアニメを見終わると自分もやろうとノートに自分のクラスの名前と誕生日を書き毎日書いていた。

しかし、何日か過ぎると、兎さんが教室から少し離れて戻ってくるとそのノートはなくなっていた。そして昼休みが終わるころに双子の蛇たちに呼び出され、下駄箱に行った。すると蛇たちはノートを持っていた。

「ね、これ何？誕生日なんか書いてさ。祝ってくれるの？そんなに金持ちなんだ？じゃあ5万くらい持ってるでしょ？明日持ってきてなよ。」

「そんなお金持ってない。」

「じゃあなんで書いてるの。キモイ。」

蛇たちはそう言うと笑って、兎さんの足と顔を蹴った。そして、蛇たちはノートを返すと「誰にも言うなよ？」と言って屋上に行ってしまった。兎さんは教室に戻りノートを閉まって、そのまま体育館に行き授業を受けました。もちろん遅くなってしまうましたが。

先生は遅くなった兎さんにびっくりして「どうしたの？大丈夫？」っというと兎さんは、泣いてしまいました。

そして兎さんはとうとう言ってしまったのです。

「蛇さんに呼び出されて殴られて蹴られた。」

その後は、先生がクラスの先生に言い、兎さんと蛇さんたちを先生に呼び出され、最初兎さんが受けたことを先生に言うと先生は蛇はそんなことを言っていないと言われてしまった。そして親を呼び出し兎さんの親は蛇たちに契約書を書きこれ以上兎さんに関わらないっということを書かせた。

そして、話終わると先生は兎さんに向かって微笑んで

「学校休まないよね？」

兎さんは首を傾げながらも頷き、先生はほっとしたような顔をした。

友人

高校に上がり、兎さんは教卓の前の座席になり、後ろの人たちが話していても視野が狭くなっていてそれすら見れなかった。

しばらくして、オリエンテーションになりネズミさんと一緒の部屋になり、朝を一緒に迎えた。その間兎さんとネズミさんは趣味の話をしていた。これのおかげで兎さんは友人が出来た。

授業になり、クラスは違うが授業のクラスで知り合った蜘蛛さんに出会った。蜘蛛さんは趣味が合って友人を紹介してもらった。

それから兎さんはいじめられずに過ごしていくようになりました。

～完～